

関東各地から60人 足利学校アカデミー開講



講演する前田専學座主

平成23年度の足利学校アカデミーの開校式と第1回学習が、18日から足利市相生町の足利市生涯学習センターで開催され、地元足利をはじめ、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京などから60人が参加した。主催者を代表して岩田市教育長が「足利

市の教育の原点である足利学校の今と、これからを生かしていきたい」と挨拶。前田専學史跡足利学校座主(東

大名普教授)が「アジヤの中の日本と足利学校」(日印交流の歴史からみて)と題して講演した。



学習する受講者(生涯学習センターで)

その中で「美人の国 足利市の美人弁天」を語っています。

② シッダールタ・シン(Siddhartha Singh)：元駐日インド大使。1997年に東京で開催された第3回日印学術交流シンポジウムで、「日本人の意識にとって、アラカン山脈が、それ以南のアジア諸国に関しては、超えがたい障害になっていると理解せざるを得ません」と述べ、インドに対する日本人の関心の薄さを述べたことがある。

③ K.V. ケーシャヴァン(K.V. Keshavan)：日本通の知識人で、ジャワハルラルネルー大学の元教授。同じシンポジウムで、ケーシャヴァンは、冒頭で「印日の二国間には、古くからの文化的絆、共通の政治体制と機構、相補的経済があるにもかかわらず、相互に冷めた、打算的な態度を発展させてきた。……不幸にも、両者の関係は強固な相互理解に基礎づけられていない」と述べた。

④ 過去の日本人とインド：かつての日本人は、日本を「辺土」、すなわちほんの片田舎と呼び、インドは仏教の開祖ブッダの生誕の地であり、「天竺」と呼んで、行きたくても行かれない正しく憧れの地であった。有名な高僧、華嚴宗の明恵上人(1173- 1232)は、じっさいに何度もインド行きを計画しながら果たす事が出来なかった。

IV 日本の神々とインド

①『「美人の国」栃木県足利市の美人弁天』(ネットによる)；

足利は昔から織物の町で、美人の多い町といわれていました。

「足利の町を訪ねれば、いにしえ忍ぶ東の京都」といわれ、西条八十作詞の「足利音頭」の中には、「足利来るなら織姫さまの…、嫁に持つなら、足利むすめ、肌はやんわり……」と歌われていることでも有名です。

歴史も古い足利市は、室町時代には、足利長尾氏が、初代長尾景人から6代目顕長まで120余年の間、足利の地を統治していました。長尾氏は城の守護神として、弁天(弁財天)を心より敬い、城の周囲に七弁天を配神し、守兵で守らせていたとのこと。長尾氏が築いた両崖山の美しい山城には、清く、おいしい水が湧き出ていたとのこと。両崖山のふもとには、とうとうと流れる清水(せいすい)が多く、その水を飲んでいた足利の女性たちは、自然に美しくなったといわれています。

その後、北関東随一の寺社文化と織物産業の隆盛の中、豊かな足利の町で育つ女性は、教養も備え、かつ洗練された身だしなみで、全国に有名な「美人」の多い土地として知られるようになりました。その足利古来の歴史からも、巖島神社の「美人弁天」は、足利市にふさわしい神様とも言えるでしょう。七福神唯一の女性である弁財天は、水を神格化した女神様です。とうとうと流れる川が、弁舌・音楽を連想させ、学問や芸術にわたり、さらに財富や智慧を与え、かつ寿命を延ばしてくれる女神として信仰を集めたのです。

水かけ弁天について：

「美人弁天」に足を運ばれましたら、まず左手に小さな弁天さまが岩の上に座っていらっしゃるのが目に留まります。「水かけ弁天」です。生命を育む「水のころ」、これを弁財天の「みこころ」というのです。弁財天は「水のころ」と「素直なころ」で私たちの生命を生み、育ててくれました。私たちの身体の80パーセントは水分でできています。水のころを大事にすることは、弁財天の「みこころ」であり、美人弁天の三願である「健康と長命と美」を保つことになるのです。心のやさしい「水かけ弁天」のご加護があなたにもそそがれますように！！

② 七福神：恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁才天(弁財天)、福祿寿、寿老人、布袋の7人の